

戦国時代を駆け抜けた 甲賀武士の実態を知る

矢川神社楼門



国指定史跡「甲賀郡中惣遺跡群」に 油日神社境内と矢川神社境内が追加指定

戦国時代、甲賀地域一帯に形成された甲賀武士の自治組織「甲賀郡中惣」。
甲賀武士の性格や自治組織のあり方を示す貴重な遺跡として、昨年度、甲南町新治地域に残る城館跡が甲賀郡中惣遺跡群として市内3例目となる国指定史跡となりました。その後も調査、研究が進められ、5月15日、国の文化審議会からの答申により、同遺跡群に油日神社境内と矢川神社境内が追加指定されることに決まりました。今月号ではその内容についてお知らせします。

戦国時代の珍しい組織 「甲賀郡中惣」

甲賀郡中惣とは、戦国時代に甲賀地域を治めていた甲賀武士の自治組織のことをいいます。この地域では権力のある領主が地域全体を支配していたのではなく、小領主がそれぞれの地域を治め、「惣」と呼ばれる連合体で物事を多数決で決定するなど、戦国時代の地域支配として全国的にも極めて珍しい組織で運営されていました。

甲賀郡中惣は、織田信長が近江に侵攻する永禄年間（1558～69年）頃に形成されたと考えられ、甲賀武士は近江南部を中心に勢

力を持ち信長に対抗した武家六角氏の主力として活躍しました。

甲南町新治地域には、小領主の連合という組織のあり方を示すものとして、里山の丘陵を利用して作られた小規模な城館遺跡がおよそ1キロメートルの範囲に密集しています。今日まで中世の姿が完全に残され、甲賀武士の活動と郡中惣の実態を知る貴重なものとして、昨年度に国指定史跡となっています。

地域の結束を固める場として機能

今回指定を受ける油日神社は、甲賀武士が崇敬していた神社であり、また、矢川神社は甲賀郡中惣の集会場

として利用され、裁判をする時の裁定の場としても利用されるなど、いずれの神社境内も甲賀武士の地域の結束を固める場として機能していました。

精神的な絆を深める場として
「油日神社」
油日神社は、平安時代にはこの地に鎮座していたと思われる。境内は優れた建造物に恵まれ、楼門、廻廊、本殿、拝殿などすべての建造物が国の重要文化財の指定を受け、中世を思わせる景観をよく残しています。

甲賀武士たちが崇敬を集

めていたことを示すものに、本殿の造営があります。本殿は明応2年（1493年）、近隣の甲賀武士たち193名の寄進により建てられたとされており、武士たちの多くの信仰を集めて造営されたことが分かります。また、5年に一度行われる県選挙無形文化財の「奴ぶり」は華やかな奴が道中を練り歩く芸能として知られていますが、これも甲賀武士である上野氏が同神社へ参詣する行事で、今もなお、民俗行事にその崇敬する姿を見ることができま



▲楼門



▲奴ぶり



油日神社拜殿